

カムフラージュメイクは万能ではない —顔に疾患のある当事者へのインタビュー調査から—

お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科

西倉実季

The purpose of this paper is to evaluate the merits and the demerits of the makeup for camouflage, based on the narratives of women with facial disfigurements. Furthermore, I attempt to examine how the support for those with facial disfigurements should be developed.

The conclusions of my paper are as follow: the makeup for camouflage is not necessarily all-rounded. The merits and the demerits of the camouflage makeup depend on the social context in which women with facial disfigurements are actually situated and the human relations they have. In supporting to those with facial disfigurements, we should consider the pluralistic meanings of the camouflage makeup.

1. はじめに

本稿の目的は、顔に血管腫などの疾患がある当事者の視点から、疾患や外傷に施されるメイク（以下では「カムフラージュメイク」とする）の有効性と問題点を検討することである。具体的には、顔に疾患のある女性へのインタビュー調査で得られたデータをもとに、彼女たちはカムフラージュメイクをすることでどのような効果を経験し、反対にどのような問題を感じているのかを明らかにする。

研究対象を顔に疾患をもつ当事者としたのは、次の理由による。筆者はこれまでの研究成果から、カムフラージュメイクが顔に疾患のある女性たちの自己意識に密接に関係しているという知見を得た。顔に疾患を抱える女性たちにとって、カムフラージュメイクはこれほど必要不可欠な存在であるにもかかわらず、従来の化粧文化研究（人文・社会科学領域での化粧研究）においては、主としてより美しくなるための化粧に焦点があてられ、疾患や外傷に施される化粧は考察の対象とされてこなかった。今日、化粧の役割がたんに「美」の提供にとどまらず、医療福祉的、社会心理的な領域にまで拡大していることを鑑みれば、疾患や外傷をもつ人々のカムフラージュメイクを研究の射程に入れることは重要な課題となってくる。

また、メイクアップアーティストや医療従事者が顔に疾患や外傷を抱える人々を援助する際は、とりわけカムフラージュメイクの有効性が強調され、その問題点は見すごされてきた。カムフラージュメイクを施したことによる成功例ばかりが取り上げられ（たとえば「メイクで疾患をうま

くカバーできた」「QOLが向上した」「笑顔が戻った」など）、失敗した事例の報告や、それがなぜ失敗に終わったのかという検討はなされていない。こうした状況を考えると、まずは顔に疾患や外傷のある当事者がどのようなことを考え、カムフラージュメイクに関してどのような経験をしているのかに注目することは、大きな意味をもっている。

以下の第2節と第3節では、メイクアップアーティストや医療従事者によるカムフラージュメイクの実践がもつ意義を確認したうえで、そこに含まれる問題点を検討する。第4節では、当事者へのインタビューで得られたデータを検討し、第5節では、本稿の立場から、 Cosmetology が何を実践するべきかを提言する。

2. メイクと医療との連携の意義

通常、顔に疾患や外傷のある人々への援助というと、形成外科手術やレーザー照射による治療が考えられる。しかし、こうした治療によって疾患や外傷の改善がみられたとしても、必ずしも完治に至るわけではない。この場合、疾患・外傷をカバーするカムフラージュメイクのはたす役割は大きい。たとえばフェイシャルセラピストのかづききれいこは、外見の悩みに関しては従来の医療の力が及ばないことを指摘し、「そのとき、もちろん医療行為としての外科的な顔の再建も大切ですが、そこにフェイシャルセラピストがリハビリメイクを加えていくと、顔は驚くほど魅力的になり、そして患者さんは本当にいきいきと社会復帰していきます」¹⁾と述べている。かづきの主張は、メイクと医療との連携による顔に疾患・外傷のある人々への援助の必要性である。

野澤桂子が述べるように、日本の医療現場においては、患者の心理に与えるメイクをはじめとする美容の効果がじゅうぶんに認識されてきたとは言いがたい²⁾。フランスでは対照的に、美容を用いた治療「ソシオエステティック」が医療の一分野として組み込まれ、患者の心理的支援の面でもめざましい実績をあげているという。この指摘をふまえ



Camouflage Makeup Is Not Necessarily All-Rounded : An Analysis of Narratives by Woman with Facial Disfigurements.

Miki Nishikura
Ochanomizu University

ば、カムフラージュメイクを媒介としたメイクアップアーティストと医療従事者との連携の意義は、強調してもしすぎることはない。

3. 専門家主導の支援がはらむ陥穽

メイクと医療との連携によって、疾患・外傷をもつ人々のQOLを向上させていくことには大きな意義がある。カムフラージュメイクを通じた支援は、コスメトロジーの重要な使命といえるだろう。しかし、こうした「支援」が、現在のところ専門家が「与えるもの」としてイメージされていることには注意が必要である。支援がこのようにイメージされる背景には、医療や看護、福祉の場面において「専門家モデル」、なかでもとりわけ「生物医学モデル」がいまなお支配的に作用しているという社会構造がある。

精神科医であり、医療人類学者でもあるアーサー・クラインマンは、患者の話を理解しようとせず、それをひたすら生物医学的診断に還元しようとする医師の姿勢を批判的に描き出している³⁾。そして「患者や医療者がある特定の病いのエピソードについて抱く考え」である「説明モデル explanatory model」という概念を提示し、患者も医療者もそれぞれの「説明モデル」をもっており、両者はしばしば食い違いをみせることを指摘している。たとえば、医療者は生物医学という「説明モデル」を頑なに保持するあまり、患者の身体の問題にばかり目を向けがちで、心理的・社会的な悩みや生活上の困難にはほとんど関心を示さないという。一方患者は、心理的・社会的な悩みや生活上の困難が軽視され、あくまでも付随的な問題としてしか考慮されないことに不満を覚える。患者が医療者とは異なる「説明モデル」を生きているということを見ようとしないう結果、野口裕二が指摘するように、医療者は「医療者と患者の「説明モデル」の違いに気づき、その違いから出発するケアをおこなうチャンスをみすみす見逃す」⁴⁾ ことになってしまう。

つまり、疾患・外傷をもつ人々の「説明モデル」を理解しようとしないう限り、当事者視点による支援は達成されないのである。クラインマンは、患者の「説明モデル」を理解するために、患者にとっての「病いの経験」、そして「病いの意味」「病いの語り」に着目するⁱ⁾。「患者は彼らの病いの経験を——つまり自分自身や重要な他者にとってそれがもつ意味を——個人的な語りとして整理するのである」⁵⁾。患者の「病いの経験」は、非専門家的「説明モデル」によって組み立てられている。クラインマンによれば、個人の「病いの語り」すなわち「病い」について語られる語りを通して、われわれはその人が「病いの経験」をどう生きているかを理解でき、さらにはより効果的なケアを提供する機会を得るといふ。本稿が当事者の語りに注目するのは、まさにこうした理由による。

4. 当事者の語り

—カムフラージュメイクの有効性と問題点—

以下では、顔に疾患のある女性たちへのインタビューで得られたデータをもとに、カムフラージュメイクの有効性と問題点を検討していくⁱⁱ⁾。女性たちは、カムフラージュメイクに関してどのような経験をしているのだろうか。なお、インタビューの対象者は、顔に疾患のある成人女性であり、男性や子どもは含まれていない。その理由は筆者の関心が成人女性にとってのカムフラージュメイクにあるためであるが、これは男性や子どもにとってのカムフラージュメイクが重要でないことを意味しない。事実、今回のインタビュー調査の対象者となった女性たちの中にも、幼少時からカムフラージュメイクをしていた人が多く、子どもにとってのカムフラージュメイクの有効性と問題点はきわめて重要な研究課題である。また単純性血管腫をもつ当事者である石井政之は、カムフラージュメイクのモデルを務めた経験から、女性が望むメイクと男性が望むそれとは違っていることを指摘している⁶⁾。メイクはもっぱら女性のものだとみなされており、必然的に男性に対するカムフラージュメイクの支援や研究は立ち遅れているのが現状である。その意味では今回のインタビューには偏りがあると言わざるを得ないが、本稿では「成人女性にとってのカムフラージュメイク」という限定をつけることでむしろ、より掘り下げた検討が可能になると考える。以下の「」内は、インタビュー・データからの引用であることを示す。

4.1 カムフラージュメイクの有効性

まず、カムフラージュメイクの有効性を検討していこう。顔に疾患のある女性たちは、カムフラージュメイクに関して、どのような効果やメリットを感じているのだろうか。

【事例1：自分に自信をもたせる手段】

やっぱり人間関係つくううえで、仕事をするにしても学校に行くにしても、やっぱりこう、一番顔っていうところは目につくもので、それによってやっぱり、人の印象っていうのが左右されるっていうのがあると思うんですよ。あの、だから、何ていうかなあ、自分がね、それによってね、化粧で隠していくらか精神的に安心できるんであればね、化粧とかそういう手段も、あの、隠すっていうよりは、自分をこう、自信をもたせるっていうか、そういう手段であるから、あの、何ていうかなあ、いいかなって。使えるものがあれば使ったらいいっていう考え方なんで(Aさん・30代・単純性血管腫)。

Aさんいわく「内面的なものとはまた別に外面的なものっていうのは、人間関係つくっていくうえで重要」である。Aさんは、あざのある彼女をそのまま受け入れてくれる人

との恋愛や当初の不安をよそに営業職として充実して働くことができた経験から、「見た目がどうであっても、やっぱり見てくれる人はちゃんと中身を見てくれる」という確信をもっている。しかしAさんによれば、中身を評価してもらえない段階に至るまでには「やはり見た目は大事」なのである。とくに初対面では、顔で第一印象が決まってしまうことが少なくない。Aさんにとってカムフラージュメイクは、人間関係の端緒を開いていくための「手段」という意味をもっていることがわかる。同様の語りは、Gさんにもみられた。

【事例2：出会いのきっかけになる】

たとえば、あの、カツラの人が、前テレビで見たんですけど、若いのにカツラの男の人がいて、最初たとえば、恋愛なりお見合いなりするときに、まあ、若いのに、なんか、すごい頭ツルツルだと、やっぱりちょっと引かれちゃうんですけど。だけど、カツラ被って、出会う。それで、自分の人となりを付き合ってるうちにわかってもらって、そうすると、「実は僕はカツラなんだよ」とかって言ったときでも、もう人となりをわかってもらってるから、自分の内面に惹かれてもらってるから、そのまま、うまくいくこともあるかもしれないけど、カツラをしてないと、まず出会いもない。最初から引かれちゃうから。それを考えると、カバーマークⅢも、あの、悪いことばっかじゃないと思うんですけどね。たぶん、その、なんか、(出会いの)きっかけを。すっぴんだったらたぶん、お見合いもたぶん、する勇気も出なかっただろうし(Gさん・40代・単純性血管腫)。

Gさんはこのように、カツラを使用している男性を引き合いに出しながら、カムフラージュメイクが「出会いのきっかけ」(ここではとくに異性との出会いのきっかけ)になると語っている。カツラやカムフラージュメイクは確かに「本来の自分を隠す」ものであるが、それをしないと、薄毛や疾患が「ネック」となって出会いの段階でつまづいてしまう。自分の「人となり」を理解してもらい段階になれば、薄毛や疾患は問題にならないかもしれないのに、その段階まで進めないというわけである。Gさんは見合い結婚をしているが、この出会いもまた、カムフラージュメイクが「きっかけ」となったことが語られている。

【事例3：普通に生きるために必要】

(カムフラージュメイクは)普通に生きるために必要なもの。だから、うーん、たとえば地震があったときとか、なんかあったときに、ひとつ持って逃げていいよって言われたらカバーマークって答えるぐらい。食べるものより何よりも大切なもの(Fさん・30代・太田母斑)。

Fさんによれば、「普通に生きる」というのは「ただ差別されないっていうか、人に見られないこと」だという。われわれが見ず知らずの他者と対面的にかかわる際、相手にわずかに視線を向けることはあるが、すぐにそらし、その人に対して特別な関心がないことを示す。これを社会学者のアーヴィング・ゴフマンは「儀礼的無関心」と名づけた⁷⁾。儀礼的無関心を装うことで、「われわれはまわりに居合わせた他人の意図を疑ったり、その存在を恐れたりしていないことを、また彼らに敵意をもったり、彼らを避けてはいることをほめめかす」⁸⁾のである。しかしゴフマンによれば、この儀礼的無関心はいつでも遵守されるとは限らず、外見に特徴のある人々に対しては不作法な視線が向けられることがある。たとえばFさんは、電車の中での執拗な視線や子どもによるあからさまな言及について語っている。カムフラージュメイクは、Fさんが「普通に生きるために」、すなわち儀礼的無関心を欠く行為の対象とならないために「必要なもの」なのである。

【事例4：仕事で利害関係を発生させないために】

私は絶対、仕事では素顔になるつもりはないんですね。なんでかというと、会社とか仕事では利害関係が発生するじゃないですか。やっぱり不利なんですよ。(中略)あと、たとえば、おなじ仕事の失敗とかしても、なんか、あの、やっぱりそういうの(=あざ)があるとマイナス・イメージになっていっちゃうから、やっぱり利害関係が発生するから。だから、絶対仕事では、素顔になるつもりはないんですね。仕事ではカバーマークがあってよかったなって思う(Bさん・40代・単純性血管腫)。

Bさんいわく、顔にあざがあっても私生活における人間関係には利害関係は生じない。というのは、もしBさんの顔を侮蔑するような人がいたとしても、その人との関係を断ち切ればすむためである。一方、仕事においては事情が異なる。たとえどんな侮蔑を受けたとしても職務上必要な関係は続けていかなければならない。さらにBさんは、仕事であざのない人と同様のミスをした場合、あざを理由に、より「マイナスな」処遇を受けるのではないかと危惧している。Bさんが「仕事では絶対、素顔になるつもりはない」のは、顔のあざがこうした「利害関係」の原因となりうるためである。このことから、Bさんにとってのカムフラージュメイクとは、「利害関係」に巻き込まれることなく仕事を継続していくうえで必要不可欠なものであると言える。

以上、当事者の語りをもとに、カムフラージュメイクの有効性を検討してきた。自分に自信がもてる、好奇心や侮蔑の対象とならない、仕事で不利な立場に置かれない。これらは、すでにメイクアップアーティストらによって指摘

されてきたことであり、目新しい知見ではない。しかし、個々人の「病いの語り」の中でそれらをみたとき、実に多様な意味合いをもっていることがわかる。

4.2 カムフラージュメイクの問題点

次に、カムフラージュメイクの問題点を検討していこう。顔に疾患のある女性たちは、カムフラージュメイクに関して、どのような問題やデメリットを感じているのだろうか。第1節でも述べたように、カムフラージュメイクの問題点はこれまであまり検討の対象とされてこなかった。そのため本稿では、なるべく多くの事例を紹介しながら、検討を進めていくことにしたい。

【事例5：普通にするのに30分】

普通にする、普通の、普通にするのに30分ていうか。そこから始まるみたいな。まずみんなと同じレベルにするまでに30分かけてみたいじゃないですか。で、それでやっと、こう、終わって、で、もうとにかく、あざが隠れて、で、普通でいったところのファンデーション塗った状態になって、それから、こう、メイクがはじまるみたいな。だから、普通のメイクアップとは全然違いますね（Hさん・40代・単純性血管腫）。

Hさんの語るカムフラージュメイクの問題点は、何よりその「煩わしさ」である。Hさんのあざは顔だけでなく、耳や首など、かなり広範囲に及んでいる。毎朝、ティッシュペーパーを何枚も使い、手をファンデーションまみれにしながら「こんなこといつまでしないといけないんだろう」と思ってしまうのだという。また語りの引用において、Hさんのメイクと「普通のメイクアップ」とが区別されていることに気がつく。通常のメイクアップのスタート地点である「普通」の状態にするまでに30分も要することが、Hさんに自分の顔がいかに「みんなと同じレベルじゃない」かを痛感させている。こうした語りは、次にみるAさんにも共通するものである。

【事例6：かえて「普通でない」と感じてしまう】

化粧しても、私のなかの化粧っていうのは限りなくその、なるべくその、自分の欠点をカバーするための化粧であって、きれいにするとか、もちろんきれいにするっていうのもどっかであるかもしれないけど、メイクをするっていうのは、とくにまあ、カバーマークもそうなんですけど、色を隠す、なるべくその、なんていうかな、人の目から見て、見たときなるべく目立たなくするというか。うーん、そういう、いわゆる防御じゃないですけど、そういう意味のメイクかなと思うんですね。あんまりその、世間一般の意味の、ただ単にきれいにするっていう意味の化粧とはまた違う意味の化粧なんかかなと思うんですね。だから、そういう意味でも、なんていうかなあ、やっぱり

そういうことのたんに、自分は普通じゃないというか、ちょっとこう、違うっていうのを、なんか意識せざるをえないじゃないんですけどね。（Aさん・30代女性・単純性血管腫）。

Aさんがカムフラージュメイクをはじめたのは、中学生のときである。Aさんは「みんなは勉強とか遊びに集中してるのに、なんで私だけ顔に気を使わないとあかんのやろ」「なんで私だけ普通の顔じゃないんやろ」という当時の「悔しさ」を振り返っている。

大学に入学し、周囲の友達がメイクをはじめると、今度はAさん自身と周囲のメイクがもつ意味合いの「違い」を意識せざるをえなくなったという。友達のメイクは「自分をきれいに見せるため」であるのに対し、Aさんのメイクは人の視線からの「防御」であり、両者は大きく異なっている。そのためAさんは、カムフラージュメイクがもつ意味を考えるたびに「自分は普通じゃない」と感じてしまうのである。このように、カムフラージュメイクがかえって、Aさんに「普通じゃない」「みんなと違う」という意識をもたらしている点は注目に値する。

【事例7：強迫観念のようになってしまった】

もう、外出するときは化粧するって、強迫観念のように。なんか、けっこう時間かかるじゃないですか。40分とか。だから、なんか寝坊とかしてお化粧できなかったらどうしようって、なんか夜も眠れなくなっちゃって。起きなくちゃ起きなくちゃと思って。うん。で、もう、それから（=いったんカムフラージュメイクをはじめてから）、もう、お化粧なしでは生きていけないあれになっちゃって（Bさん・40代・単純性血管腫）。

Bさんの人生の「転機」は、大学生になってカムフラージュメイクをはじめたことだという。というのは、メイクをすることで「視線がこわくて気持ちが休まらない」という不安は解消したものの、一度メイクをするとそれが「強迫観念」になってしまったためである。この「強迫観念」は、ノーメイクのBさんがいる部屋に突然誰かが入ってくる夢をしばしば見るほど強いものだという。カムフラージュメイクをはじめて以来、それなしでは「生きていけな」くなったBさんは、人間関係において次のような問題を感じている。引き続き、Bさんの語りをみていこう。

女の友達とでも、親しくなっても、やっぱり、自分の素顔を知らないってことは、隠してるってことは、ほんとに友達なんだろうかっていう。一回隠してしまうと、途中から、あの、話したりとか見せたりとかっていうのは無理なんですよ。そうすると、ほんとに、あの一、なんか、いつもなんか、なんでしょう、あの、架空の付き合いをしてるような感覚。隠すっていうのって、ほんと、精神的にきついんですよ。

このように、Bさんにとってそれを使いはじめたことが人生の「転機」として感じられるほど、カムフラージュメイクはかつては経験しなかった日常生活上の、また人間関係上の問題をもたらししている。

【事例8：後ろめたい】

メイクをするとすごくあの、一瞬はすごく楽になるんだけど、やっぱりあの、何ていうか、メイクをするっていうことはメイクを取るっていう瞬間もあるわけで、何かそのあたりの切り替えがうまくできなかったっていうか。(中略)やっぱり隠してるっていうか、まあ、隠してることには変わりはないんだけど、何かこう後ろめたさみたいな罪悪感みたいなも持つ人もいる。罪悪感といえば罪悪感だし、後ろめたさといえば後ろめたさなんだけど、何かなあ、やっぱり隠してるっていうことなのかなあ (Cさん・40代・単純性血管腫)。

カムフラージュメイクであざを「隠す」ことの「罪悪感」や「後ろめたさ」は、Cさんへのインタビューの中で繰り返し語られた言葉である。それは、生まれもった自分の顔を「隠す」Cさん自身に対する「罪悪感」であり「後ろめたさ」であるという。Cさんがカムフラージュメイクをはじめたのは、「そのままの顔で出て行くことの生きにくさ」を感じたためである。けれども、「なんでそんなに隠してココソソするのか」と思う「もうひとりの自分」がいる。

カムフラージュメイクをしていれば、視線の対象となることなく「普通にやり通せる」。しかしそのぶん、「楽な方に流れていってしまって」自分の顔に「対面しないで」すませてしまったとCさんは振り返る。それをCさんは「化粧の功罪」と表現している。

【事例9：化粧は「ハンデ」】

うーん、じっとテレビ見ても、なかなかれるもの(＝就ける職業)ないですよ。これだけのハンデで。化粧してるだけのハンデで。もちろんスポーツ選手は無理ですよ。ダラダラ汗かいて。スポーツも運動音痴だからいいんですけど(笑)。で、たとえば、こう、キャリアウーマンでバリバリしようとしても、働くとしても、なんか、たとえば宿泊の出張が多かったり、なんかそういうものあるところ(＝カムフラージュメイク)の方で気を使わないといけなから、もうそっち、仕事に集中できないだろうなって。なんかちょっとずつ、全部引っかかるんですよ (Dさん・40代・単純性血管腫)。

Dさんにとって、カムフラージュメイクは「パッシング」の意味をもっている。「パッシング」とは、社会学者のゴフマンの用語であり、露見すれば差別の対象となる自己に関する情報(属性や身体的特性など)を隠蔽すること

である⁹⁾。「カバーマークがなければ就職もきつかった」とDさんが言うように、パッシングとしてのカムフラージュメイクは、彼女の就職を後押ししている。しかし一方で、Dさんによれば、職業の選択肢を限定してしまうという意味でカムフラージュメイクは「ハンデ」である。引用では、隠蔽したはずの情報が容易に露見してしまうスポーツ選手と、パッシングにばかり集中しなければならない宿泊出張の多い仕事が、就けない職業の例として語られている。

パッシングと職業との関係については、Eさんのインタビューにおいても語られた。

【事例10：仕事に身が入らない】

お化粧品も汗とかで落ちたりするとイヤやなと思うから、しょっちゅうコンパクトでこうして、はたき直して。それで、ちょっとこう、お化粧がはげかかって下の地肌がね、何となく黒くなってね、「まずい!」と思うと、カバーマーク塗ってこよやかなと思って家まで帰ったりとか。でも、あんまりカバーマークの付きが悪いとね、仕事も身に入らない。それぐらい、いつも片隅に置きながらね (Eさん・40代・大田母斑)。

パッシングによって情報の隠蔽に成功したとしても、当の本人は、自らが隠蔽する必要のある情報をもっていることを忘れることはできない。それどころか、それは意識の中心に居座り、つねに不安に駆り立てることになる。

【事例11：晩年はどうするのだろう】

カバーマークも年齢的に限界がくると思うので。これから。しわ強調しちゃうし。変ですよ、おばあさんが、なんか厚い化粧してたら。うん、だから、あの一、それ考えるとぞっとしちゃうんですよ。カバーマークで生きてた人の晩年って、どうされてたんだろうと思って (Gさん・40代・単純性血管腫)。

40代を迎えたGさんは、カムフラージュメイクの乗りが悪くなったことを気にかけている。Gさんによれば、いつかカバーマークが使えなくなったとき、「すっぴんで生きてく勇気をもつ」か「外出さえも困難になってしまう」かのいずれかだという。しかし、これまで「カバーマークで構築してきた人間関係」を考えると、前者を選択することは至難の業である。「カバーマークできない年寄り」になることを想像して、Gさんは「ぞっと」してしまうのである。

石井政之は、欧米では手記やウェブサイトという形で顔に疾患や外傷のある当事者の肉声が記録され、誰でもアクセスできるのに対し、日本では当事者の支えとなる情報が不足していると指摘している¹⁰⁾。そのため、疾患や外傷のある顔で生きる際に直面するであろう困難にいかに対処すればよいか、当事者がその方法を知ることは容易ではない。「カバーマークで生きてきた人たちはいったいどんな

晩年を送ったんだろう」というGさんの言葉からは、こうした問題が浮かび上がってくる。

5. まとめ—当事者視点の支援に向けて—

以上、顔に疾患のある女性たちへのインタビューで得られたデータをもとに、カムフラージュメイクの有効性と問題点を検討してきた。カムフラージュメイクは、顔に疾患のある女性たちの日常生活においてきわめて重要な役割をはたしている。しかしその一方で、メイクをすることでかえって「普通でない」と感じてしまう、自分自身に「罪悪感」を抱いてしまう、メイクが「強迫観念」になってしまうなどの問題点がある。

顔に疾患のある女性たちの語りが示すのは、カムフラージュメイクがもつ意味合いの重層性である。カムフラージュメイクが有効であるか問題含みであるかは、一概に決まるものではなく、それをする個人を取り囲む状況や人間関係に依存している。Cさんが「化粧の功罪」、またBさんが「メイクの陰と陽」と表現するように、カムフラージュメイクは本質的に両義性をはらむとさえ言える。さらに、ライフステージの移行にともない、カムフラージュメイクのもつ意味合いも刻々と変化していく。生物医学という専門家の「説明モデル」にのみ依拠してしまうと、「カムフラージュメイク→患者のQOLの向上」といった一般的な見方に陥る可能性がある。なぜなら、カムフラージュメイクがもたらす問題点の多くは、心理的・社会的な悩みや日常生活上の困難であり、それらは生物医学というモデルでは把握できないためである。カムフラージュメイクに含まれる意味の重層性や両義性をすくい上げるためには、非専門家的な「説明モデル」によって組み立てられた「病いの経験」をめぐる語りを理解する必要がある。

近年、メイクアップアーティストや医療従事者により、顔に疾患・外傷のある人々への支援としてカムフラージュメイクが注目されていることは先に述べた。顔に疾患や外傷のある人々へのより効果的な支援を目指し、メイクと医療との領域を越えた連携が進められている。日本の医療現場において、外見の問題が等閑視されがちであったことを考えれば、これは評価しうる動向である。しかし、当事者の視点からみたとときカムフラージュメイクが決して万能ではないことを念頭に置きつつ、支援を行なっていく必要があるのではないだろうか。いつ、いかなる状況で、どのようなライフステージにおいて、当事者はカムフラージュメイクにメリットあるいはデメリットを感じるのか。そうしたメリットはどのように増幅させていくことができるのか。また、デメリットはどのように軽減することができるのか。コスメトロジーの実践は、当事者の「病いの経験」に積極的に目を向け、それを起点に支援を構築していくことから始まる。

- i) クラインマンは「疾患 disease」と「病い illness」とを対比的に用いている。江口の表現を借りると、「疾患とは、医療専門職がその医学モデルに従って病気をいわば「外側」から再構成するものであるとするならば、後者の「病い」とは、患者や家族の当事者にとって、いわば内側から経験されたものということになる」(強調点は江口による)¹¹⁾。
- ii) インタビューは2003年11月～2004年12月にかけて、8名を対象者として実施した。インタビューに要した時間はそれぞれ2～3時間程度である。インタビューは録音し、逐一文字化した。インタビュー・データの引用中の()内は、意味を明確にするための筆者による補足である。
- iii) あざや傷のうえに塗る化粧品。cover(=覆う) mark(=あざ)。

(参考文献)

- 1) かづきれいこ「リハビリメイクは自分の顔を受け入れ社会復帰するためのサポート」かづきれいこ・田上順次(編)『デンタル・メディカルスタッフのためのリハビリメイク入門』医歯薬出版、2004年、2-9頁。
- 2) 野澤桂子「治療場における美容—ソシオエステティックの心理的効果」『こころの科学』117、日本評論社、2004年、63-69頁。
- 3) Kleinman, Arthur 1988 The Illness Narratives: Suffering, Healing and the Human Condition, Basic Books. =江口重幸ほか(訳)『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房、1996年。
- 4) 野口裕二『物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院、2002年、65頁。
- 5) Kleinman 前掲書、61頁。
- 6) 石井政之『顔がたり—ユニークフェイスな人びとに流れる時間』まどか出版、2004年。
- 7) Goffman, Erving 1963 Behavior in Public Places: Note on the Social Organization of Gatherings, The Free Press. =丸木恵祐・本名信行(訳)『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』誠信書房、1980年。
- 8) Goffman 前掲書、95頁。
- 9) Goffman, Erving 1963 Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity, Prentice-Hall, Inc. =石黒毅(訳)『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房、1970年。
- 10) 石井政之「当事者が語り、書くという冒険」石井政之・藤井輝明・松本学(編著)『見つめられる顔—ユニークフェイスの体験』高文研、2001年、198-205頁。
- 11) 江口重幸「病いの経験を聴く—医療人類学の系譜とナラティブ・アプローチ」小森康永・野口裕二・野村直樹(編)『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社、1999年、36頁。

●その他の参考文献

- ・Flick, Uwe 1995 *Qualitative Forschung*, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. =小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（訳）『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社、2002年。
- ・藤井輝明（編）『顔とトラウマ—医療・看護・教育における実践活動』かもがわ出版、2001年。
- ・石井政之『顔面漂流記—アザをもつジャーナリスト』かもがわ出版、1999年。
- ・石井政之『迷いの体—ボディイメージの揺らぎと生きる』三輪書店、2001年。
- ・かづきれいこ『メイク・セラピー—顔と心に効くりハビリメイク』筑摩書房、2001年。
- ・かづきれいこ『かづきれいこのいきいきメイク』筑摩書房（ちくま文庫）、2002年。
- ・松本学・石井政之・藤井輝明（編）『知っていますか？ ユニークフェイス—問一答』解放出版社、2001年。
- ・桜井厚『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年。

